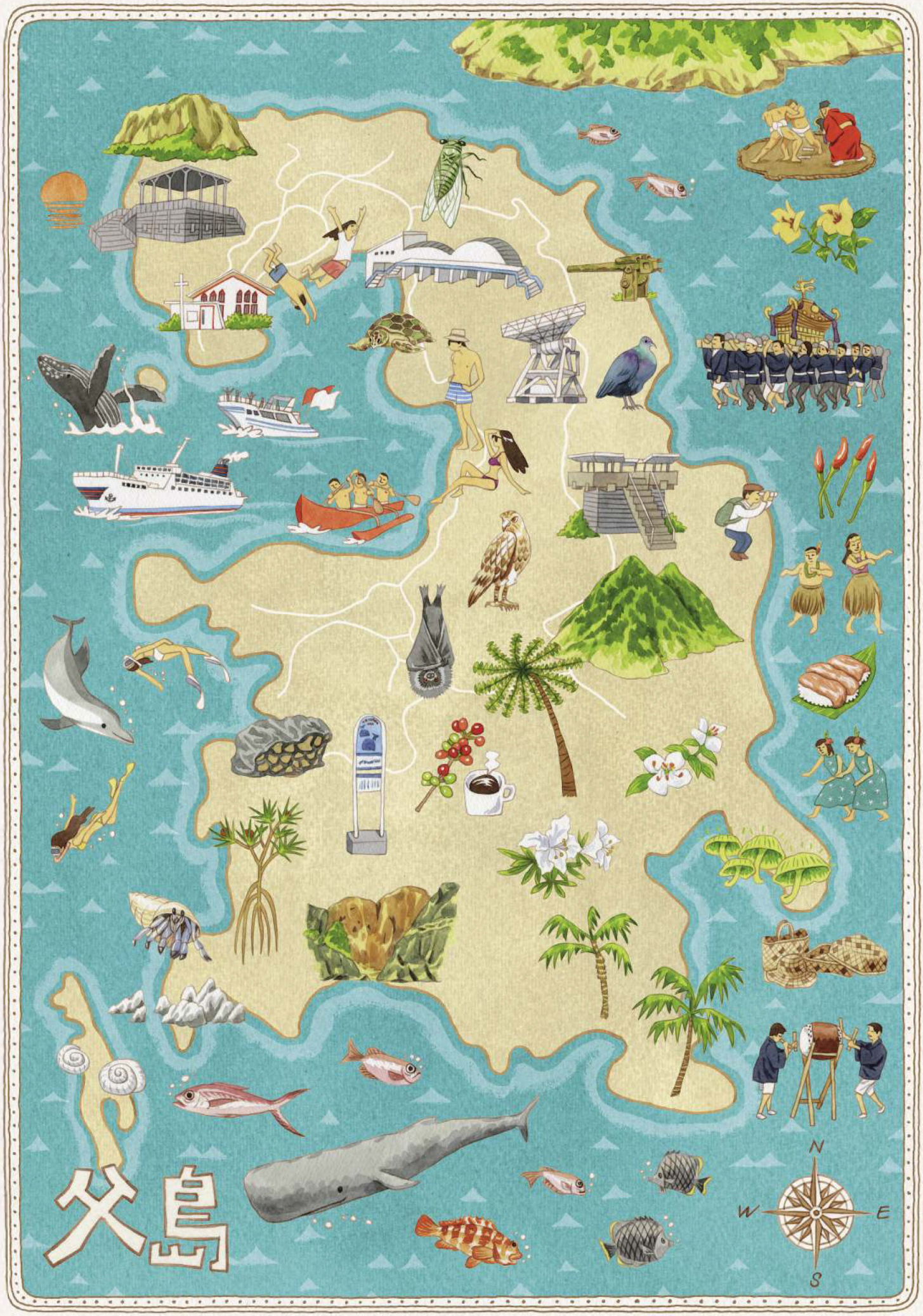
The Spirit of Ogasawara Islands

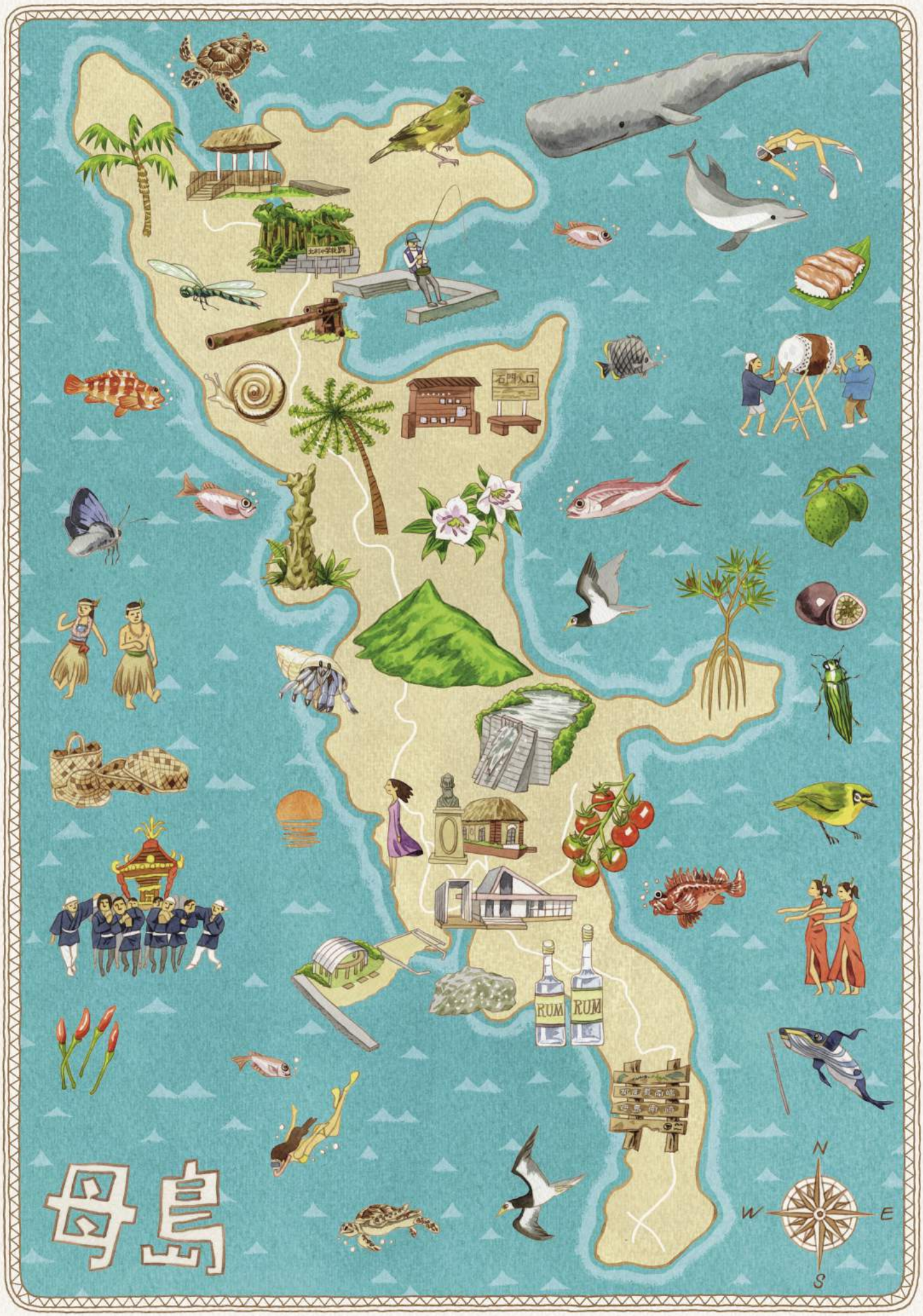
小笠原諸島返還50周年記念誌

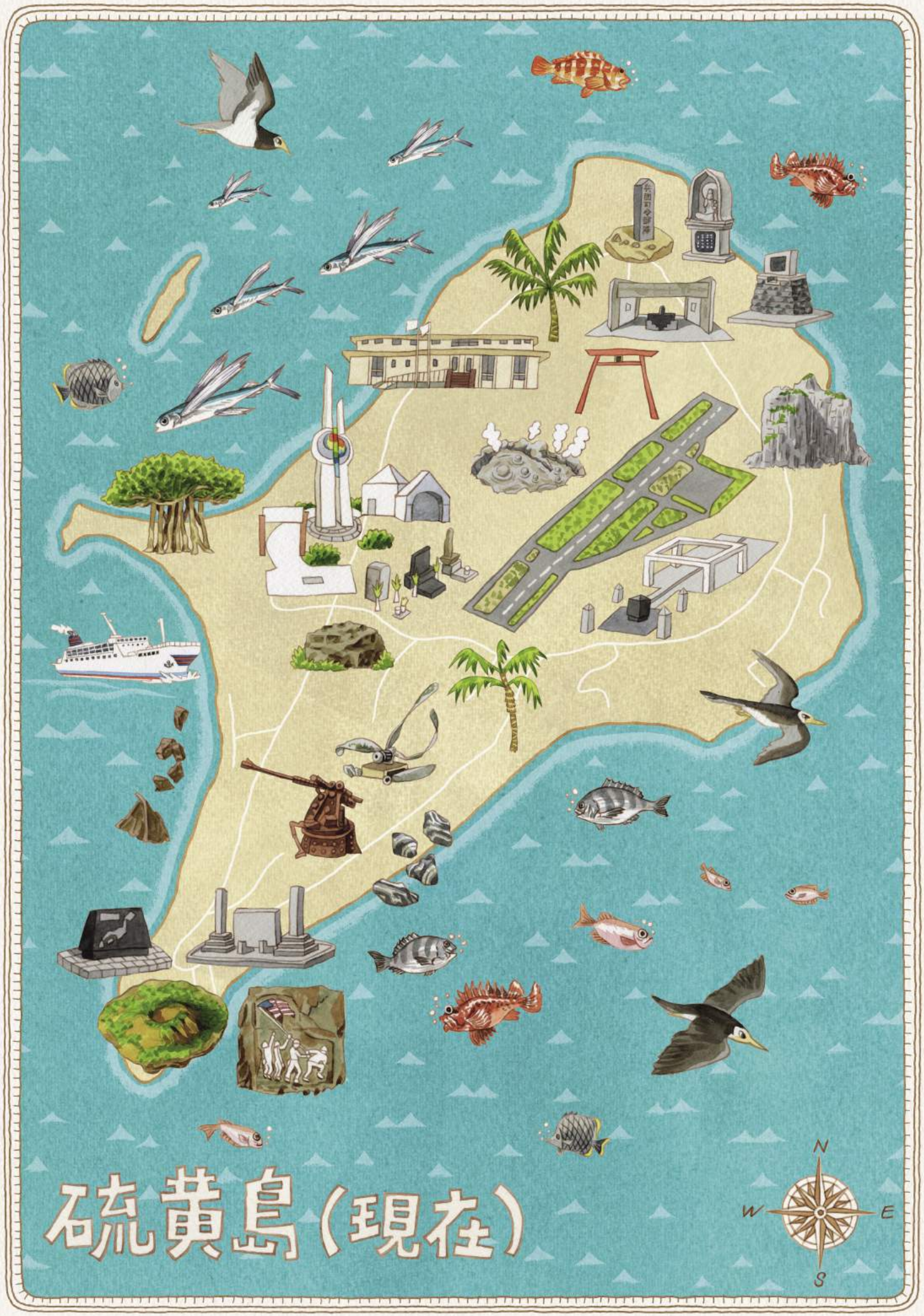
原色

小笠原の魂

The Spirit of Ogasawara Islands


父島
N
W
E
S


母島
石門入口
RUM
RUM
N
W
E
S


硫黄島（現在）
N
W
E
S

硫黄島(過去)
N
W
E
S

返還50周年記念誌の発刊にあたって

小笠原諸島返還50周年記念事業実行委員会会長
小笠原村長
森下一男

小笠原諸島が返還50周年を迎えるにあたり、昨年来記念誌の作成を進めてまいりましたが、小笠原諸島日本復帰50周年の記念すべき日に発刊の運びとなりました。

昭和43（1968）年に米国から返還された後、小笠原諸島は復興、振興と時代を重ねてまいりましたが、振り返れば早や50年、半世紀の時が過ぎたことになります。

この間の復興、振興には国・東京都の支援、諸先輩方や多くの関係者の皆様の様々なご苦労、ご尽力によって、今日の小笠原村が再び築きあげられてきたところでございます。

誌面は、親しみやすくなるように写真などの画像を多く使いました。小笠原諸島の歴史全般を俯瞰する内容、そして小笠原村の「今」を知っていただく内容、また郷土への誇りと愛着をもって今日を作り上げてきた人々にも目を向けました。繁栄の時代から全島民強制疎開、それに引き続く空白の時間という激動の荒波にのみこまれた小笠原村への理解を多くの方々に深めていただき、また、将来にわたって伝えていくことも念頭に置きました。

本誌によりまして、小笠原村が歩んできた歴史をより深く感じとっていただき、本村への愛着をより高めていただくことができれば幸いでございます。

最後になりましたが、本誌の発刊に際しましてご協力をいただきました多くの方々、関係機関に対しまして、深く敬意を表するとともに感謝を申しあげる次第です。

返還50周年記念誌刊行に寄せて

小笠原村議会議長
池田　望

小笠原諸島が、昭和43年6月26日に日本に復帰してから、50年の歳月が経過いたしました。

この記念すべき節目に小笠原諸島返還50周年記念誌が、多くの方々のご尽力により刊行の運びとなりましたことは、誠に喜ばしい限りであります。

小笠原は、先の大戦により全島民の強制疎開が実施され、終戦後、施政権がアメリカに移りました。そして23年間もの長きに渡り日本に返還されることもなく、島民の帰島は叶いませんでした。帰島を願う多くの先輩方が、困難に直面されながらも努力に努力を重ねた復帰運動の結果として、本土復帰が実現されたのです。

復帰後は国や東京都の支援により、着実に今日の小笠原が築き上げられています。

そして今では、日本中から小笠原に魅せられて多くの方が移り住んで来ています。多様な文化を結集し、先人たちが取り組んで来られた偉大なる功績に学び、これからの50年に向けて、むらづくりに取り組んで行きたいと思います。

終わりに小笠原村の発展の礎を築かれました方々に対し、心から感謝しますとともに、本記念誌の刊行にあたりご尽力をいただきました実行委員会の皆様をはじめ、ご支援をいただきました各位に対し、厚く御礼申し上げ小笠原諸島返還50周年記念誌刊行の言葉といたします。

Spirit 01

プロローグ

小笠原博物誌

東京から南へ約1000kmの有人島である父島・母島、自衛隊員などが常駐する硫黄島や南鳥島、その他多数の無人島を含め、大小30余りの島々からなる小笠原諸島。地理的にはもちろん、歴史的にも日本の他の地域とは一線を画す、唯一無二の存在である島々の「文化」「産業」「自然」などをさまざまなキーワードで紹介する。

Ogasawara A to Z

P010 **A**griculture&Fishery
P012 **B**onin Blue
P014 **C**ulture
P015 **D**isaster
P016 **E**ducation
P017 **F**ood
P018 **G**overnment／**H**ospital
P019 **I**nfrastructure
P020 **J**ob
P021 **K**indness
P022 **L**anguage／**M**eteorology
P023 **N**atural Heritage
P024 **O**gasawara-maru
P025 **P**eople
P026 **Q**uest
P027 **R**esidence
P028 **S**afety
P029 **T**ourism
P030 **U**nique
P032 **V**olcano
P033 **W**hale
P034 **X**-day／**Y**ear
P035 **Z**one

OGASAWARA
A to Z

A

Agriculture & Fishery
農業&漁業

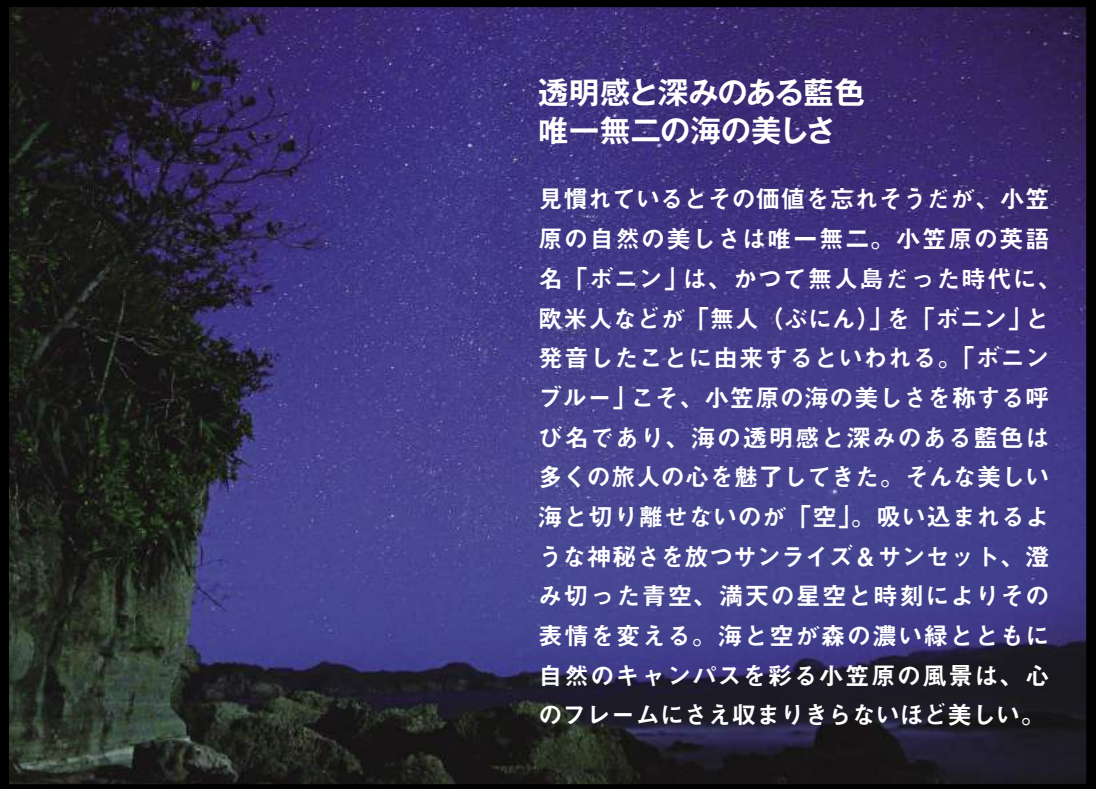
南国らしいフルーツや野菜類
周辺の海域は魚介類も豊富

亜熱帯の海洋島という特有の気候と地形を生かした農作物の栽培が盛んで、パッションフルーツ、マンゴー、レモンなど南国らしいフルーツや野菜類はもちろん、日本では珍しくコーヒー豆も栽培されている。一方、自然の恩恵を受けているのは漁業も同じ。シマアジ、マダイ、カンパチなどのほか、カジキマグロ、オナガダイ（ハマダイ）、アカバ（アカハタ）など高級魚の漁獲も盛んだ。農地法が未施行など歴史的経緯による課題も残ってはいるが、農業、そして漁業ともに、近年は若手の従事者も増え、さらなる活性化が期待されている。

OGASAWARA
A to Z

B

Bonin Blue
ボニンブルー



透明感と深みのある藍色
唯一無二の海の美しさ

見慣れているとその価値を忘れそうだが、小笠原の自然の美しさは唯一無二。小笠原の英語名「ボニン」は、かつて無人島だった時代に、欧米人などが「無人（ぶにん）」を「ボニン」と発音したことに由来するといわれる。「ボニンブルー」こそ、小笠原の海の美しさを称する呼び名であり、海の透明感と深みのある藍色は多くの旅人の心を魅了してきた。そんな美しい海と切り離せないのが「空」。吸い込まれるような神秘さを放つサンライズ＆サンセット、澄み切った青空、満天の星空と時刻によりその表情を変える。海と空が森の濃い緑とともに自然のキャンバスを彩る小笠原の風景は、心のフレームにさえ収まりきらないほど美しい。

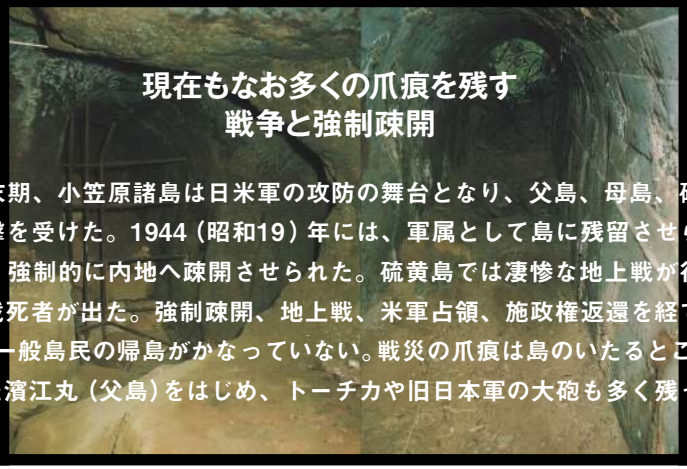
OGASAWARA
A to Z

C

Culture 文化

日本由来の文化と世界各地の文化の融合 異国の踊りを伝承する「南洋踊り」

小笠原諸島は、信濃国守護・小笠原長時のひ孫である小笠原貞頼により、1593（文禄2）年に発見されたという伝説をもつ。だが、実際の最初の定住者は日本人ではなく、捕鯨船に水や食料を供給するために住み着いた欧米人や太平洋諸島民であった。また戦前には南洋貿易の中継地点となっていたため、太平洋各地の文化が流入。例えば、2000（平成12）年に東京都指定無形民俗文化財に指定された「南洋踊り」のルーツは、ミクロネシアの島々の踊りだと言われる。他にも、小笠原太鼓やタコノ葉細工など、伝統文化の影響を受けつつ、小笠原で独自に発展してきた芸能や工芸がみられる。さらに返還後も、スティールパンという楽器やフラが新しい文化として根付き、小笠原はますます多様な文化が混じり合う場となっている。



現在もなお多くの爪痕を残す
戦争と強制疎開

太平洋戦争の末期、小笠原諸島は日米軍の攻防の舞台となり、父島、母島、硫黄島は米軍から激しい攻撃を受けた。1944（昭和19）年には、軍属として島に残留させられた島民以外の全島民が、強制的に内地へ疎開させられた。硫黄島では凄惨な地上戦が行われ、島民を含む多大な戦死者が出た。強制疎開、地上戦、米軍占領、施政権返還を経て、硫黄島では現在もなお、一般島民の帰島がかなっていない。戦災の爪痕は島のいたるところに見られ、例えば座礁した濱江丸（父島）をはじめ、トーチカや旧日本軍の大砲も多く残っている。

子どもたちはのびのびと育つものの競争意識が芽生えにくい教育環境

島民が世界各地にルーツを持つ小笠原諸島。父島の学校では大正時代まで、日本語と英語での2言語授業が実施されていた。米軍占領下では英語での授業が中心となり、返還後は日本語での授業のみとなった。島での義務教育は、父島と母島に各1校ずつある村立の小・中学校で行われている。高校は都立校が父島に1校だけのため、中学卒業後、進学する母島の子どもたちはふるさとを離れなくてはならないのが現状だ。また、内地と比べて子どもたちに競争意識が芽生えにくい半面、のびのびと育っている傾向がある。内地の高校や大学に進学した子どもたちにとって、その意識の差がストレスになることも。そのため近年は、修学旅行などで内地の学校と交流を図るなどの取り組みも盛んに行われている。

Education
教育

Food
食事情

島寿司

島寿司、亀料理、ダンプレンほか
島ならではの美食がそろう

離島であるがゆえ、古くから貴重なたんぱく源として食されてきたのが青海亀。現在も、煮込みや刺身などが食べられている。また八丈島から伝わったとされている、サワラなど白身魚を醤油やみりんで漬けた「島寿司」も名物。それ以外にも、島ではおなじみのアカバ、ピーマカをはじめ、欧米系島民の食文化に由来するダンプレンなど、内地で出会えない料理は多い。現在、父島のメインストリートにはレストランやおしゃれなカフェもあって食事には困らないが、多くの食材を内地からの船便に頼っているため、入港日直前は生鮮食品などの品数が少なくなるという不便さはある。

亀の煮込み

亀の刺身

OGASAWARA
A to Z

G

Government
行政

目まぐるしい行政の移り変わり
国境離島ゆえに総合事務所の設置も

もともとは無人島だった小笠原諸島に、欧米系や太平洋諸島系の入植者が住み始めたのが1830（文政13）年。日本の領土として国際的に認められたのは1876（明治9）年のこと。統治において、稀有な歴史を歩んできたこの島は、1880（明治13）年に東京府の管轄となるものの、太平洋戦争の敗戦によりアメリカの占領下に。1968（昭和43）年に返還された後も、1979（昭和54）年の村政確立までは、都が村の職務を執行する形で整備が進められた。また国境離島ゆえ、小笠原総合事務所が設置され、入国管理、検疫、植物防疫などを扱うほか、父島や硫黄島には自衛隊、南鳥島には気象庁と自衛隊の職員らが常駐している。

OGASAWARA
A to Z

H

Hospital
医療

急患はもちろん出産時など
多くの課題が残る医療体制

東京から約1000km、内地への公共交通機関が定期便「おがさわら丸」のみという現実は、医療体制において大きな課題を投げかけている。父島と母島にはそれぞれ診療所があり、医師と看護師も常駐しているが、麻酔医がいないなどの理由から手術や出産ができず、診療所で対応が難しい急患が出た場合は、海上自衛隊のヘリコプターなどで内地の病院に運ばれる。また、慢性疾患や出産では長期の離島を余儀なくされるため、島民の精神的、経済的な負担も大きい。近年は、有料老人ホームの設立など、医療・福祉サービスの質の向上も進められているが、まだ多くの課題は残されている。

OGASAWARA
A to Z

玉川ダム

各種インフラは整備済みも
ごみ、トイレ、生活用水の問題が顕著に

水道、電気、ガスなどのライフラインは整備されており、生活に支障がない。また近年では光ファイバーケーブルが整備されたため、インターネット、携帯電話、固定電話、テレビ放送など通信インフラも不便さを感じさせない。しかし、観光客の増加などにともなうごみ処理問題、トイレ問題など新しい課題も。生活用水も、父島と母島にダムはあるものの、雨水を利用しているため節水が不可欠となっている。ちなみに交通インフラについては、観光ルートの確立に必要な幹線道路、島民の生活に密着する産業・生活基盤道路は整備済み。交通手段は、父島では扇浦線と大村～奥村循環線の2路線を村営バスが、1時間あたり1便の間隔で運行しているが、母島には公共の交通手段はない。観光客向けには、両島とも、タクシー、レンタカー、レンタバイク、レンタサイクル（父島のみ）が用意されている。

Job
仕事

観光客の受け入れ体制に課題が残るも
エコツーリズムを基軸にガイド業が急成長

島民の就職者のうち、農業、漁業などの第一次産業に携わる人は全体の1割程度。もともとは釣りやダイビングなどマリンレジャー系の観光事業が多かったが、20世紀末からホエールウォッチングやドルフィンスイムなどエコツアーも急成長。世界自然遺産登録後は、トレッキングなどの山の観光業も急速に拡大。エコツーリズムによるガイド業は、今後さらに伸びる可能性がある。たしかに、観光客の増加により、飲食業や宿泊業をはじめとする観光ビジネスは順調だが、宿泊施設に関しては、小規模な民宿やペンションが中心で大規模なホテルがなく、受け入れ体制に課題が残る。

OGASAWARA
A to Z

K

Kindness
人情

フレンドリーな気質
おもてなしの心を感じる見送り

日本のみならず世界各地にルーツを持つ人たちが共存してきた歴史、そして新島民を受け入れてきたことからも、よくありがちな島ならではの閉鎖感はあまりなく、フレンドリーな気質を持つ島民たち。出航した「おがさわら丸」を船で二見湾の外まで追いかけて見送ることが名物になっている。港でも、小笠原太鼓を鳴らしたり、南洋踊りを踊ったりするなど、島ならではのおもてなしが感じられる。そして別れ際に、「ありがとう」「いってらっしゃい」という言葉とともに、人懐っこさあふれる笑顔で見送られると、「また必ずここに戻ってこよう」という気持ちになる。

OGASAWARA
A to Z
L
Language

言葉
方言
地名

ピジン言語などの影響を受け
独自の進化を遂げた小笠原の言葉

日本人が移住する前から住んでいた外国系の島民は、英語に太平洋諸島の言語をはじめ他の言語が混じった、ピジン語やクレオール語（異言語間で生まれた接触言語）を話していた。その後、日本人も多く移住してきたが、八丈島の出身者が多かったため、小笠原の言葉は、八丈島の方言、英語、太平洋諸島の言語などさまざまな言葉が混ざりあった独自の混合言語へと進化していった。日本領になってからは帰化した外国系の島民が日本語を学ぶようになり、逆に日系の入植者の一部は英語を学んでいた。戦後の米軍占領下では、帰島できた欧米系島民が英語中心の生活を送っていた。現在は新島民が増えてきたこともあり島内の言葉はほぼ標準語だ。ただし地名に関しては、英語名などかつての名残を感じ取れる。

OGASAWARA
A to Z
M
Meteorology
気象

夏と冬の気温差が少なく
年間を通じて暖かく過ごしやすい

南鳥島、沖ノ鳥島は熱帯に属するが、それ以外は亜熱帯に位置し、温暖多湿な海洋性気候に属する小笠原諸島は、年間を通じて暖かく、夏と冬の気温差は少ない。梅雨前線は小笠原の北に現れることが多いため内地のような梅雨はないといわれているが、父島は5月と11月の降水量が多く、夏季はスコールが降ることも度々。平均湿度は80％を超え、むしむしとした暑さだ。大きな被害をもたらす台風が接近することもあり、台風シーズンは注意が必要。漁業やおがさわら丸の運航に影響することもある。一方、冬季は、春にかけて風が強く吹くが、日中は長袖シャツ1枚でも過ごせる暖かさだ。

独自の進化を遂げた固有種を守るエコツーリズムへの取り組み

隔絶された環境により生まれた特異な生態系が高く評価され、2011（平成23）年に小笠原諸島が世界自然遺産に登録されたのは周知の通り。島で独自の進化を遂げた動植物はなんと550種以上で、特にカタツムリなどの陸産貝類と、シダなどの維管束植物の固有率には目を見張るものがある。小笠原諸島に生息する陸産貝類106種のうち100種が固有種という驚異的な報告があるほどだ。こうしたかけがえのない自然を守っていくために、島民はもちろん、旅行者自身も“自然が財産”という意識を持つことが大切。エコツーリズムの基本理念を軸にして取り組んでいる。

Natural Heritage

世界自然遺産

OGASAWARA
A to Z
N

OGASAWARA
A to Z

O

Ogasawara-maru おがさわら丸

島民のライフラインであり観光客にとっても唯一の足

内地と小笠原諸島を結ぶ唯一の定期貨客船として重要な役割を果たしている「おがさわら丸」。1968（昭和43）年の返還後、当初は東京都が黒潮丸を運航していたが、1972（昭和47）年から小笠原海運が定期船の運航を開始し、現在に至っている。当初は「椿丸」、続いて「父島丸」によって運航。「初代おがさわら丸」が登場したのは1979（昭和54）年のことだった。その後、1997（平成9）年～2016（平成28）年まで「2代目おがさわら丸」、現在は、より大型化、高速化された3代目が就航している。通常は週に1便、繁忙期は3～4日に1度のペースで運航し、所要時間は24時間。また父島・母島間は「ははじま丸」が足となり、多くの島民や観光客を運んでいる。

初代

2代目

新ははじま丸

3代目

OGASAWARA
A to Z
P

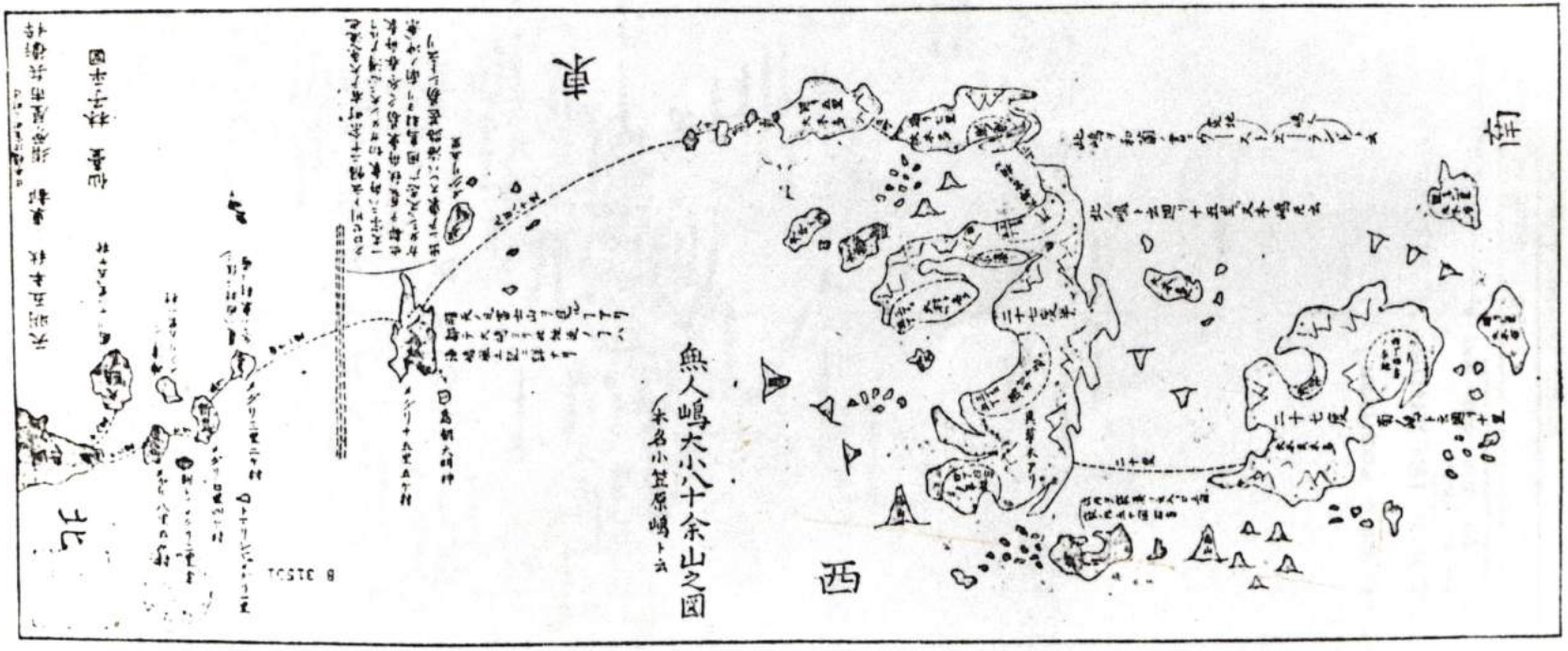
People
島の人々

歴史的背景により
カテゴライズされる住民事情

現在、父島と母島に暮らす島民は約2500人。歴史的な背景により、島の人々は、欧米系島民、旧島民、新島民、公務員や企業の赴任者に大きくカテゴライズされる。日本の領有後も住み続けた欧米系の子孫は、現在はおおむね5世代目を超えている。また強制疎開により島を離れた旧島民のなかには、返還後も帰島しなかった人が多く、加えて高齢化も進み、島の人口の1割程度を占めるのみ。島に住む人たちの多くは、小笠原諸島に魅了され移り住んだ新島民と赴任者だ。

OGASAWARA
A to Z

Q



最初の定住者は欧米人
外国捕鯨船の中継地点でもあった

遡ること大航海時代、小笠原諸島の存在が明らかになったのは、スペイン戦艦サン・ファン・デ・レトラン号が1543（天文12）年に硫黄列島を発見したことを嚆矢とする。日本側には1593（文禄2）年、小笠原貞頼によって発見されたという伝説があるが、現在では学術的には事実でないとされている。1670（寛文10）年に日本の蜜柑船が母島に漂流し、島の存在を幕府に報告したため、幕府の命で現地調査が実施された。その後100年以上を経て、1830年に欧米系と太平洋諸島系の人びとが定住し始め、小笠原は捕鯨船の寄港地として発展し始めた。最終的に明治維新後の1876（明治9）年、日本が領有に成功し、日本人の本格的な移住が始まった。

Quest
探求・発見

OGASAWARA
A to Z
R

Residence
住まい

多くの島民は都営小笠原住宅で生活
依然として厳しい住宅事情

戦前の土地登記簿は現在も残っているものの、強制疎開で島を離れた後、返還後も帰島しなかった人も多く、所有者への連絡が取れないなどの理由から手を付けられない土地も多い。また、国有地が多く、ライフラインは集落にしか引かれていないので、そもそも人が住める土地も限られている。土地、住宅の取得が困難なため、住民の半数以上は都営小笠原住宅に暮らしているのが現状だ。住居について父島の景観形成特別地区内では、3階建以上または300㎡以上の建築物を新築、増築、改築、移転、外観変更する場合は、景観法に基づく届出が必要である。建築資材も内地から輸送するためコストが高い。

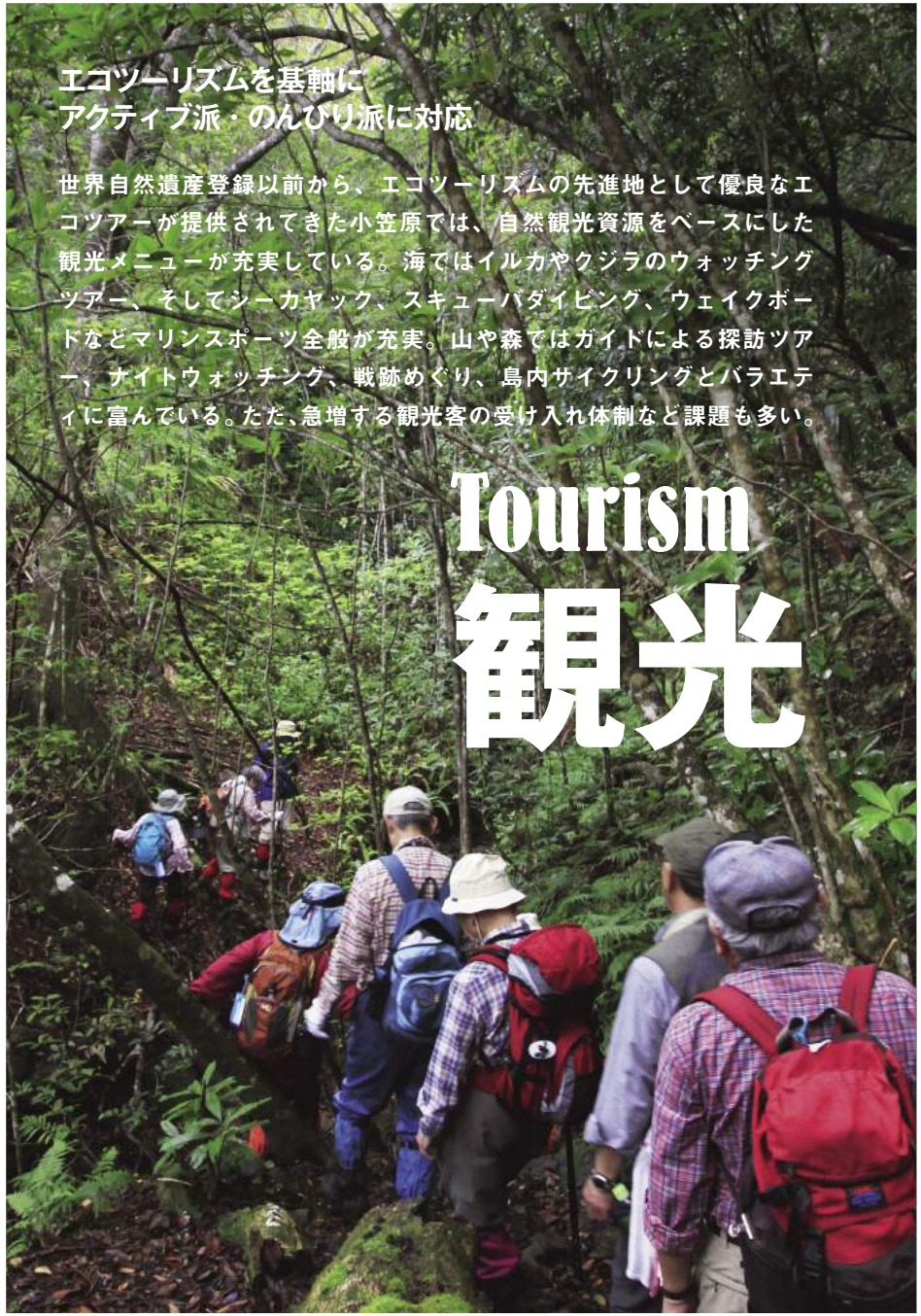
OGASAWARA
A to Z

S

Safety
防災

自然災害への対策はもちろん
南海トラフ巨大地震への対応力も強化

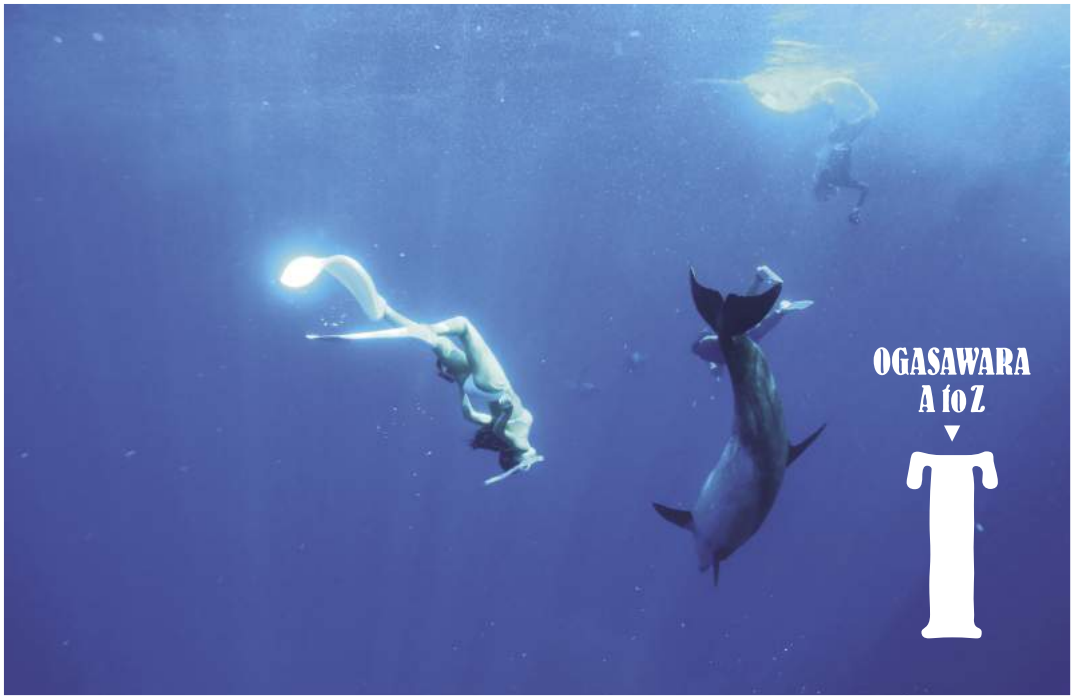
台風や大雨による自然災害、火災、緊急事故などに対する脆弱性に加え、観光客など一時的な滞在者が多いことから、島には特別な対応が求められてきた。土砂災害に備えた危険箇所マップによる周知、早めの情報発信を心掛けてきたのはもちろん、災害実績を踏まえた海岸事業なども進められている。また近年は、東日本大震災の教訓による津波災害対策への取り組みや、東京都による「南海トラフ巨大地震等による東京の被害想定」を基にハザードマップを作成。情報センターや浄水場、診療所など公共施設の高台への移設も実施されている。



エコツーリズムを基軸に
アクティブ派・のんびり派に対応

世界自然遺産登録以前から、エコツーリズムの先進地として優良なエコツアーが提供されてきた小笠原では、自然観光資源をベースにした観光メニューが充実している。海ではイルカやクジラのウォッチングツアー、そしてシーカヤック、スキューバダイビング、ウェイクボードなどマリンスポーツ全般が充実。山や森ではガイドによる探訪ツアー、ナイトウォッチング、戦跡めぐり、島内サイクリングとバラエティに富んでいる。ただ、急増する観光客の受け入れ体制など課題も多い。

Tourism
観光



OGASAWARA
A to Z
T

OGASAWARA
A to Z

U

Unique ユニークな島

海洋島という希少な環境は
独自に進化した固有種、希少種の宝庫

四方を海によって隔絶された海洋島ゆえ、独自の進化を遂げてきた「固有種」の宝庫である小笠原。常緑広葉樹林に覆われた島には亜熱帯性の植物が多く、ワダンノキ、シロテツ、オオハマギキョウなどの世界的にも珍しい固有植物も少なくない。一方、動物に目を向けると、陸産貝類は実に90%が固有種でまさに“カタツムリの楽園”。また鳥類では、特別天然記念物であり国際保護鳥のアホウドリや、同じく特別天然記念物で母島にしか生息していないハハジマメグロをはじめ、アカガシラカラスバト、オガサワラノスリ、オガサワラハシナガウグイスなど貴重な個体が生息する。これら多彩かつユニークな自然体系が世界自然遺産登録の大きな理由にもなっている。

オガサワラクロベンケイガニ

カツオドリ

タコノキ

アカガシラカラスバト

ハハジマメグロ

テリハハマボウ

ムニンツツジ

ワダンノキ

アサヒエビネ

ムニンヒメツバキ

ヌノメカタマイマイ

オガサワラオオコウモリ

テンスジオカモノアラガイ

シマウツボ

シマアカネ

カタマイマイ

シマシャリンバイ

ハハジマノボタン

ヘラナレン

オガサワラススキ

Volcano
火山
（硫黄島、西之島）

火山列島とも呼ばれる硫黄列島
噴火により西之島が12倍に

小笠原諸島のうち、父島列島、母島列島、聟島列島は海底火山の隆起によりできた島で、平地が少なく、海岸部は断崖が多い。硫黄島など3島からなる硫黄列島も、火山列島とも呼ばれる火山の島。硫黄島は平地が多く、戦前は農業や漁業が盛んだったという。太平洋戦争時に激戦地となり、その後米軍の占領下に。戦前の住民やその子孫は島に戻ることができず、現在は自衛隊の隊員などが常駐している。また2013（平成25）年には西之島南東沖で噴火が起こり、テレビニュースでも話題になった新島が誕生。溶岩流により西之島と一体化、結果的に西之島の面積は約12倍に拡大した（2018年4月現在）。

写真提供／海上保安庁

OGASAWARA
A to Z
W

Whale
クジラ

通年ホエールウォッチングが盛ん
「捕る資源」から「観る資源」へ

小笠原諸島とクジラとの歴史は古く、切っても切れない関係が現在も続いている。そもそも、無人島だった父島、母島に人が住み始めたきっかけは捕鯨だった。その拠点として島に人々が住み、捕鯨船や貿易船の寄港地としても栄えた。その後も捕鯨は続くが、世界的な捕鯨規制の流れもあり、現在は「捕る資源」から「観る資源」へ。小笠原では、陸上からも洋上からもホエールウォッチングを楽しめる。通年で観られるのがマッコウクジラ、12月～5月はザトウクジラで、子育て中のクジラに遭遇することも。クジラ以外にも、ミナミハンドウイルカ、ハシナガイルカほか、20種類以上の鯨類が小笠原近海で回遊している。

X-day

小笠原返還の日

（1968年6月26日）

艱難辛苦を乗り越えて
節目の年に返還記念式典を開催

太平洋戦争後、サンフランシスコ講和条約により小笠原諸島は、沖縄、奄美とともにアメリカの施政権下に置かれた。その後、奄美は返還されたものの、小笠原が日本に返還されたのは、敗戦から23年後、1968（昭和43）年6月26日のことだった（沖縄は1972年に返還）。その間、歴代首相・閣僚らがアメリカ側と根気強く交渉を続け、1962（昭和37）年にケネディ大統領が小笠原諸島に対する日本の（潜在）主権を認める。日本国内でも返還運動が強まり、1967（昭和42）年、ジョンソン・佐藤会談で返還合意に達した。返還後は、日本政府や東京都によって、復興事業が急ピッチで進められた。現在も施政権返還を記念して、毎年6月に返還記念祭が行われている。

OGASAWARA
A to Z

Y

Year

小笠原歳時記

季節ごと表情が違う島
皆で楽しめる各種イベントが充実

元旦に行われる「日本一早い海びらき」は全国的に有名だが、景色や天候をはじめ季節ごとにさまざまな表情に出会える島では各種イベントが多彩。6月の返還祭、8月のサマーフェスティバル、12月のカウントダウンイベント、島内神社の例大祭など、年間を通してさまざまな催しが開催される。体験できるアクティビティも季節によって異なるため、それぞれが好きな季節を楽しめる。

1月　日本一早い海びらき、ロードレース大会

2月　ザトウクジラウォッチングのベストシーズン、カンヒザクラ、真っ赤なトマト、文化サークルフェスティバル

3月　ビーデの花に送られる卒業式、応援団旗の見送り船、海亀漁（新亀）

4月　出会いの季節（入学式・赴任者の転入）、甘酸っぱいパッションフルーツ

5月　こども祭り、母島小中学校の運動会、ヒメツバキ開花、雨の季節

6月　夏到来、羽アリ（イエシロアリ）群飛、ドルフィンスイムのベストシーズン返還祭、アオウミガメの産卵シーズン

7月　父島アウトリガーカヌーレース、貞頼神社例大祭、遠泳大会、ハハジマノボタン

8月　定期船着発運航、サマーフェスティバル、盆踊り、花火大会

9月　敬老大会、母島アウトリガーカヌーレース、マンゴー、緑の島レモン

10月　父島小中高連合運動会、セミの鳴き声、ハロウィン

11月　大神山神社例大祭、月ヶ丘神社例大祭、雨の季節、村民健康診断、父母交流スポーツ大会

12月　クリスマスイルミネーション、サンタが船で来島、カウントダウンイベント